

Q6

辺野古新基地建設が予定されている場所の地震発生や地盤沈下の危険性について、専門家からどのような見解が示されていますか。

地面の下を掘り下げていくと最後には固い岩の層があり、そこには多くの割れ目（断層）があります。ここに大きな力が加わると、割れ目が壊れて、その衝撃が地面にまで伝わると地震になります。このような断層のうち、特に数十万年前以降に繰り返し活動し、将来も活動することが考えられる断層を「活断層」と呼びます。

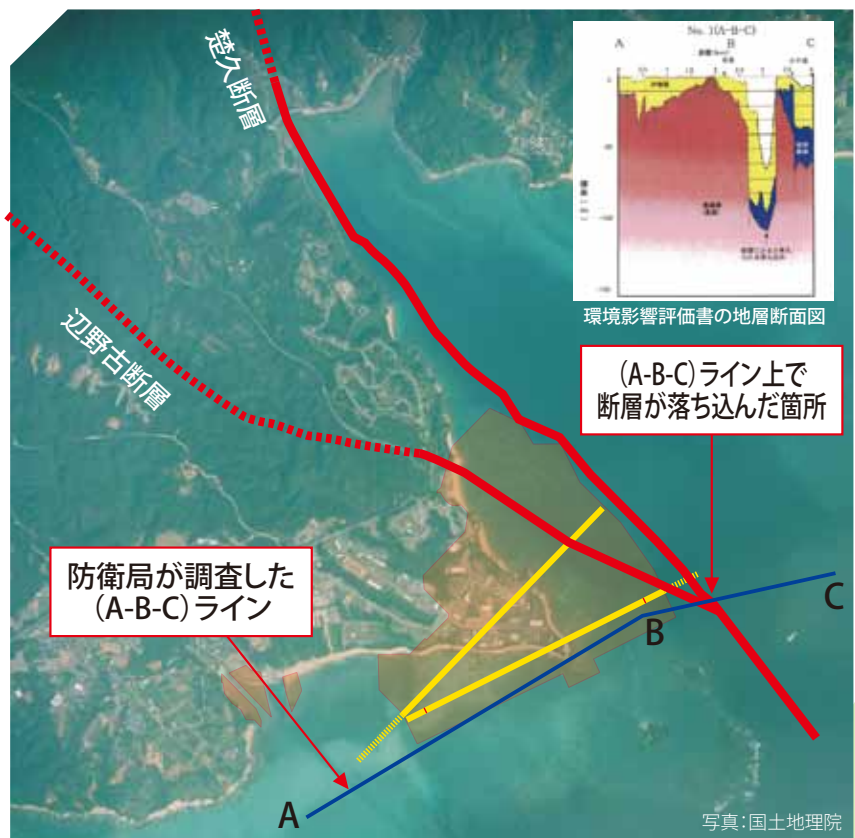
辺野古新基地建設予定地近くの大浦湾海域には、2つの断層が交わり、50メートル以上急激に落ち込んでいる地形が見られ、ここが活断層の可能性があると指摘する地質学者がいます。

また、海溝型の地震は活断層型の地震より発生間隔がずっと短く、100年～200年くらいで発生しますが、過去の地震の発生状況などから、新基地建設予定地一帯における海溝型の地震や津波の危険を指摘する地質学者や環境学者もいます。

国は、2014年5月から2017年4月まで断続的に、この深い落ち込みが見られる断層付近を岩盤調査船を使い重点的にボーリング調査を行っていました。沖縄県は、国に何度も調査結果のデータを求めています。国はその調査目的やデータを公開することなく埋立工事を進めています。

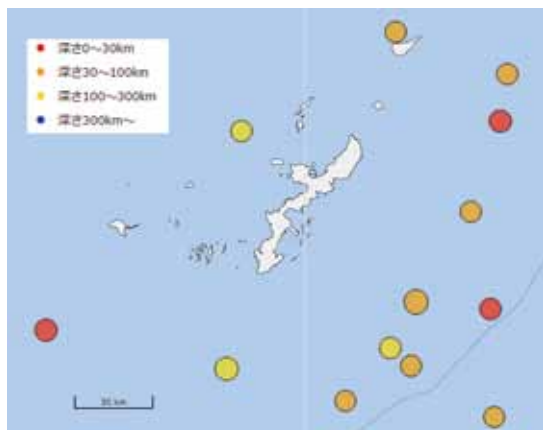
一方で、同海域は、地質図から、サンゴ礁とその下に琉球石灰岩が堆積する軟弱地盤であると考え、大規模な地盤改良や工事が必要な難工事になることを予測する土木技術者もいます。

いずれにしても、建設予定地の地層や地盤の安全性を確認するため、国は、実施した地質調査データを早急に公表すべきです。



「落ち込み」のある海底地形※(赤い線が断層です。)

※上の写真は、国土地理院長の承諾を得て、国土地理院撮影の空中写真を複製したものである。(承認番号 平28情復、第1360号)
 ※承認を得て作成した複製品を第三者がさらに複製する場合には、国土地理院の長の承諾を得なければならない。



■ 沖縄本島近海で観測されたマグニチュード6以上の地震 (1923年～2017年)

	発生日	マグニチュード		発生日	マグニチュード
1	2010年 2月27日	M7.2	8	1962年 6月23日	M6.0
2	2008年 7月8日	M6.1	9	1960年 9月12日	M6.1
3	2004年 7月22日	M6.1	10	1959年 5月26日	M6.1
4	2001年 8月18日	M6.4	11	1953年 7月22日	M6.2
5	1968年 8月3日	M6.3	12	1926年 2月3日	M6.0
6	1963年 1月31日	M6.2	13	1923年 8月12日	M6.7
7	1962年 10月6日	M6.4			

気象庁データベースより

※気象庁の統計データでは、1923年から2017年の94年間に沖縄本島近海におけるマグニチュード6以上の地震は「13回」あり、地震が多い日本の中でも沖縄県は地震が少ない地域とはいえません。